

■10月21日

国交省、ミャンマーと航空当局間協議

国交省は、ミャンマーとの航空当局間協議を10月22日から24日にかけて、ヤンゴンで開催するお発表した。国交省交通省航空局航空交渉室によると、オープンスカイを視野に入れた輸送力の拡大が焦点となる見込み。羽田の発着枠については、「今のところ想定していない」とした。

現在、日本—ミャンマー間は全日空が成田—ヤンゴン線を週7便で運航している。一方、ミャンマー政府は茨城県と今夏、ミャンマー国際航空による茨城—ヤンゴン線のプログラムチャーター就航で覚書締結を行っている。

(トラベルビジョン)10/20

<http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=59258> (-> <http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=59258>)

(茨城新聞)8/20

http://ibarakinews.jp/news/news.php?f_jun=13769192282169 (-> http://ibarakinews.jp/news/news.php?f_jun=13769192282169)

(国交省プレスリリース)10/18

http://www.mlit.go.jp/report/press/kouku03_hh_000218.html (-> http://www.mlit.go.jp/report/press/kouku03_hh_000218.html)

(日刊航空)10/21

<http://www.da-news.co.jp/xhp/today.htm> (-> <http://www.da-news.co.jp/xhp/today.htm>)

日航、燃油サーチャージ値上げ

日航は18日、2013年12月1日から2014年1月31日までの発券分について燃油サーチャージを1年ぶりに値上げすると発表した。2013年8月から9月のシンガポールケロシン市況価格の2ヶ月平均が1バレルあたり124.34米ドルになったため。

値上げ幅は最も安い韓国と極東ロシアで、日本発で1名片道あたり現行から200円値上げの2200円、最も高い北米や欧州、中東、オセアニアが2500円増の2万3500円。

(トラベルビジョン)10/20

<http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=59266> (-> <http://www.travelvision.jp/news/detail.php?id=59266>)

(JALプレスリリース)10/18

<http://press.jal.co.jp/ja/release/201310/002684.html> (-> <http://press.jal.co.jp/ja/release/201310/002684.html>)

◆ 運賃額：(日本発旅程を日本でご購入の場合。額はお一人さま一区間片道あたり)

	現行: Zone F (110ドル基準)	改定後: Zone G (120ドル基準)
韓国・極東ロシア	2,000円	2,200円
中国・台湾・香港	5,500円	6,000円
グアム・フィリピン・パラオ・ベトナム	6,500円	7,000円
タイ・シンガポール・マレーシア	10,500円	11,500円
インドネシア・インド・ハワイ	13,500円	15,000円
北米・欧州・中東・オセアニア	21,000円	23,500円

下地島空港、利用活用を日航・スカイマークに要請

(宮古毎日によると)

下地敏彦市長は17日、東京にある日本航空(JAL、植木義晴社長)とスカイマーク(SKY、西久保慎一社長)の本社を訪ね、下地島空港での実機訓練実施などを要請した。それに対しJALは空港使用料見直しについて県へ要請中で回答を待っている状況と説明。SKYは現状では使用する考えはないと回答した。

下地市長から要請を受けたJALの日岡裕之執行役員総務本部長は、下地島空港の建設経緯から見て訓練から撤退したことは心苦しいとしながらも、現在も再建途上であり、まずは再建に全力で取り組みたい考えを示した。

パイロット訓練に関しては経費削減の観点から現在、グアムでの実施を検討していることを説明。一方で、下地島空

港については管理運営費をJALと全日空で分担する方式から、訓練の回数に応じて使用料を支払う従量制に変更するなど、負担の緩和について県に要請していること、調整の結果、使用料負担がグアムと変わらない状況となった場合には、下地島空港での訓練再開を検討しても良いとの考えを示した。この時点では県からの回答は届いていないという。

SKYへは下地島空港での実機訓練のほか、那覇－宮古線の増便と東京、大阪直行便の就航についてを西久保社長へ要請した。

下地空港での訓練について西久保社長は、経費が高いことを理由に「当面は考えていない」と回答した。現在、2往復4便を就航させている那覇－宮古線については1往復2便を増やし、3往復6便とすることを検討していると説明。東京、大阪直行便就航については意欲を示した上で、機材の調達状況などを見据えながら、成田－宮古、伊丹－宮古を想定し検討を進める方針を示した。

下地市長は「県の空港だが、もし閉港などとなれば市、特に伊良部への経済的ダメージは大きい。何とか訓練を行ってもらえるよう要請活動をしている。今後も県をバックアップする形で要請活動などを行っていきたい」と語った。

(宮古毎日新聞)10/18

<http://www.miyakomainichi.com/2013/10/55672/> (-> <http://www.miyakomainichi.com/2013/10/55672/>)

中華航空、花巻－台北チャーター便、今秋も人気、定期便へ意欲

中華航空による、台湾と本県を結ぶ秋季国際チャーター便の第1便が19日、花巻空港に到着した。11月4日までの計8便はほぼ満席で、約600人が訪問予定。県内や東北の観光地を巡る。

冬季も台湾からのチャーター便の運航が決まっており、中華航空の孫洪祥会長は来県した9月、国際定期便に意欲を示している。

(岩手日報)10/20

<http://www.iwate-np.co.jp/economy/y2013/m10/e1310201.html> (-> <http://www.iwate-np.co.jp/economy/y2013/m10/e1310201.html>)

シンガポール航空、世界最長路線シンガポール－ニューアーク線、11月廃止

シンガポール航空は20日までに、民間航空会社の直行便としては世界最長のシンガポール－ニューアーク路線を今年11月に廃止する方針を明らかにした。

同路線のフライト時間は約19時間。使用の機材は、エアバスA340型機。燃費の悪さなどが原因で採算がとれにくく路線廃止に踏み切ったとみられる。

同社はまた、世界で2番目の最長路線(フライト時間約18時間)であるシンガポール－ロサンゼルス線を今月廃止する。

同上2路線廃止に伴い、世界最長の直航便は、カンタス航空によるシドニー－ダラス間の8600マイル(約1万3840キロ)便となる。また、搭乗時間での世界最長路線はデルタ航空のアトランター、ヨハネスブルク間の約17時間となる。

(CNN)10/20

<http://www.cnn.co.jp/business/35038732.html> (-> <http://www.cnn.co.jp/business/35038732.html>)

ボーイング社、ボーイング747-8型機、月間生産機数1.5機に調整

ボーイング社は、2015年までボーイング747-8型機を生産機数を月産1.75機から1.5機に生産調整すると発表した。大型機や貨物機の需要が低迷しているため。尚、ボーイング747-8型機は累計107機を受注し、これまでに56機を納入している。

同社では、2014年から航空機の需要は成長すると見ており、今後20年間にボーイング747-8型機のような大型機の世界需要は760機を見込んでいる。

(レスポンス)10/20

<http://response.jp/article/2013/10/20/208911.html> (-> <http://response.jp/article/2013/10/20/208911.html>)

マレーシア、エアバスと協働、航空機整備拠点強化

(産経bizによると)

マレーシアは航空市場が急拡大するアジア太平洋地域で、航空機の整備拠点を目指す。ナジブ首相は航空機の整備・修理(MRO)分野を雇用創出に貢献する重要事業と位置付け、政府として成長を後押しする意向を示した。同国は今年、機体整備などで約24億リンギット(約743億円)の売り上げを見込んでおり、今後は年10%のペースで拡大、最終的に2万人の雇用を創出するとしている。現地紙ニュー・ストレーツ・タイムズなどが報じた。

同国のMRO分野の核となるのは、欧州航空機大手エアバスが40%を出資する合弁企業セパン・エアクラフト・エンジニアリング(SAE)。2006年創立の同社は今年、4000万リンギットを投じて、マレーシア西部のセラゴール州セパンにエアバスのA320型機を3機同時に格納できる格納庫を新設した(敷地面積は1万3000平方メートル)。

SAEの現在の取引先は、格安航空会社(LCC)アジア最大手エアアジアのマレーシア、タイ、インドネシア各現地法人や、シンガポールのタイガー・エアウェイズ、インドネシアのマングラ航空、マレーシアのファイアフライ航空といったLCCとミャンマー国際航空、ベトナム航空など。格納庫新設による事業拡大でアジア地域のLCCをさらに呼び込みたい考えだ。

同社は15年までに従業員を現在の400人から600人に増員し、売り上げに占める外国の航空会社の比率を50%以上に引き上げるとしている。

また、エアバスは新格納庫に隣接して同社のカスタマーサービス・センターを設置する。同様の施設は仏トゥールーズ、独ハンブルク、米ウィチタ、中国の北京にあり、マレーシアは同社の整備・修理のグローバルサービスネットワークに組み込まれる形となった。

エアバスのブレジエ最高経営責任者は「東南アジアの航空市場は巨大な可能性を秘めている」と述べ、同センターで新たに整備員100人以上を雇用する考えを示した。同社は今後20年間の世界の航空機需要が約3万機(総額4兆4000億ドル=約429兆5720億円)に達すると予想、うち47%がアジア太平洋地域に集中するとしている。

マレーシアのMRO分野の最大の課題は、質の高いサービスを提供する人材の確保とみられている。これに対し、ナジブ首相は「エアバスと緊密に協力し、優秀な人材の育成に当たりたい」と述べた。

(産経biz)10/21

<http://www.sankeibiz.jp/macro/news/131021/mcb1310210621011-n1.htm> (->

<http://www.sankeibiz.jp/macro/news/131021/mcb1310210621011-n1.htm>)

エアブサン(LCC)、釜山—シエムリアップ、高雄線開設

エアブサンは国際線2路線の開設を発表した。11月6日より、釜山—シエムリアップ線は、使用機材エアバスA321型機(195人乗り)で週4便運航を開始する。

また、12月11日より、釜山—高雄線にボーイング737-400型機(162人乗り)で週4便で就航し、12月23日以降はエアバスA321型機(195人乗り)で運航を行う。

(日刊航空)10/21

<http://www.da-news.co.jp/xhp/today.htm> (-> <http://www.da-news.co.jp/xhp/today.htm>)

スクート(LCC)、シンガポールーパース線開設

スクートは12月19日より、シンガポールーパース線に週5便で就航する。使用機材はボーイング777-200型機。就航記念キャンペーンとして、シンガポールからパースまで片道88シンガポールドル(諸税込み)で10月16日より販売している。

(日刊航空)10/21

<http://www.da-news.co.jp/xhp/today.htm> (-> <http://www.da-news.co.jp/xhp/today.htm>)